

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 4 月 10 日現在

機関番号：14401
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：22520240
研究課題名(和文)カルチュラル・スタディーズと呼ばれたモダニズム

研究課題名(英文)Modernism, Alias Cultural Studies

研究代表者

山田 雄三 (YAMADA, Yuzo)

大阪大学・文学研究科・准教授

研究者番号：10273715

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円、(間接経費) 870,000円

研究成果の概要(和文)：補助金助成を受けた期間中におけるもっとも大きな成果は、1冊の本として出版した『ニューレフトと呼ばれたモダニストたち - 英語圏モダニズムの政治と文学』(松柏社、2013年6月)である。補助金助成期間中に海外で行った資料収集や聞き取り調査をもとに、書き下ろしている。モダニズムといえば、文芸・芸術領域の一思潮としてばかり扱われてきたが、イギリスの地域コミュニティとメトロポリスとの関係の変更を目指して試みられたに政治過程であることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：My publications include "Modernism, Alias Cultural Studies: An Analysis on Politics and Letters in Anglophone Modernism" (Tokyo: Shohakusha, 2013:6). In this book, I interpreted the New Left movements in the late 1950s as a revival of the project of Anglophone modernist politics which had originally attempted to revise the relationship between London/the metropolis and the peripheral areas in the UK in the 1930s.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：モダニズム ニューレフト カルチュラル・スタディーズ

1. 研究開始当初の背景

本研究ともっとも深い関係にあるカルチュラル・スタディーズ(以下、CS)は、研究開始当初、アジアを含む世界諸地域に浸透しつつある新興の分野であった。1990年代にアメリカ合衆国で盛り上がったCSは、1950年代後半に Raymond Williams や Richard Hoggart などの英文学者がウェールズの農村やリーズの労働者居住地にも独自の文化があることを主張したことに始まる。その歴史に関する近年の英国モダニズム研究の動向を見ると、たとえば Jed Esty は、その主著 *Shrinking Island: Modernism and National Culture in England* (Princeton UP, 2004)において、Williams らの仕事が英国の文化概念に人類学的転回をもたらしたと述べた。これはかなりの程度、正鵠を得ている。なぜなら英国は 20 世紀をとおして、大英帝国から一小国に縮小してきたのであり、その動きのなかで海外の領土より自国のコミュニティへと視点を転じてきたことも理解できるからである。しかし、Esty の研究では第二次世界大戦終結期に顕著な帝国の縮小とナショナリズムの台頭が強調されるあまり、20 世紀の長い期間、世界規模で起こる脱帝国化と移民など人口移動にともなう文化接触の状況については手付かずに終わってしまっていた。本研究ではその不備を補うため、1950 年代からサッチャー政権誕生までのモダニズムの政治学へと調査の範囲を広げたものである。

また、Williams や Hoggart は、CS の鼻祖として教科書的な扱いはされることはあっても、彼らの仕事の全行程を跡付ける研究や、それらとモダニズムとの関係について包括的に扱った研究は、国内外見回しても少ない状況がつづいていた。その原因は明らかで、1970 年代に起こった「言語学的転回」によって、構造主義記号論とポスト構造主義理論が優勢になり、経験主義的な色彩が強い Williams らのモダニズム文化論は急速に「古い」という烙印を押されたからである。モダニズムといえば、文芸・芸術領域の一思潮としてばかり扱われてきたが、Williams の仕事を再調査するなかで、モダニズムとはイギリスの地域コミュニティとメトロポリスとの関係の変更を目指して試みられたに政治過程ではなかったのかという着想を得た。その根拠となったのは Williams が最晩年に行った「モダニズムの政治」分析である。ただ、この分析は Williams 逝去にともなって、未完のままであり、それを彼が残したメモなどのアーカイブをもとに復元する必要があった。

2. 研究の目的

上述した Esty の研究は、CS やニューレフトを大英帝国瓦解後の内向きな運動としてとらえ、縮小する英国に見られる、あくまで国内固有の動きだと考えている。しかし、西欧のモダニズムが国際的な動きであったの

と同じように、1960 年代から 1980 年代までの CS およびニューレフトもまた、帝国瓦解後の国際情勢(例えばスエズ動乱やフォークランド紛争)と深く関係していたと考えられる。本研究では、英国の CS を新たな角度から読み直し、それを国際化する現代社会におけるモダニズム的な反応として見直す点で、独創的であったと信じている。

そもそも CS は英文学研究から出発しながらも、今日それは社会学に属する新興の学問分野になっている。英文学研究は Williams や英国のニューレフトたちの仕事を正に評価してこなかったのだから、当然のなりゆきであった。しかし、上述したように、この CS という分野は元来、人文科学と社会科学の垣根を越えた学際性を特質とする。英文学の分野で研究を出発した者にとって、20 世紀初めのモダニズムの諸理論を土台として、ニューレフトが独自の文化理論や政治への関わり方を提唱していることを明らかにすることは、CS の歴史について、英文学の側から新しい視点を提供することにつうじると思われる。なぜなら、英文学研究の分野は、ことばや修辞、劇的発話や物語るものが社会的政治的に果たす効果について十分な研究の歴史と蓄積を持つからである。そうであれば、社会学で行なわれている CS と相互補完的に補い合う、ダイナミックな研究となるはずである。

その大きな目的に則って、本研究では 1950 年代後半のニューレフトによる文筆活動が、1930 年代のモダニズムを継承していることを一次文献の比較をとおして、証明することを主眼としていた。より具体的には「田舎と都会」という二分法的な思考のしかたが、メトロポリス中心の産物であり、その思考法の起源を探り、その発展的解消を目指す文筆スタンスのなかに両者に共通する特徴を見つけ出すことを目指した。

3. 研究の方法

主な方法は文献調査および口頭での情報収集である。研究開始年度よりケンブリッジ大学図書館及びスウォンジー大学図書館レイモンド・ウィリアムズ・アーカイヴを定期的に訪れて、資料の調査および有識者からの情報収集を継続して行ってきた。本研究課題に関係する資料のうち、市場に流通した図書や定期刊行物に関しては、本国の大学図書館等でかなりの情報を得ることができたが、諸共同体やサークル内だけの刊行物に関しては、上述のアーカイヴや炭鉱労働者図書館(Miners' Library)で有意義な情報を得ることができた。以下に研究項目ごとに、研究の方法を示す。

「George Orwell のモダニズム」: 1930 年代のモダニストのうち George Orwell を重点的に取り上げ、CS やニューレフトが彼をどのように再評価したかを調査した。彼の評価をめぐっては、CS の言論は多様であり、彼のモダニスト的な発想のどこが評価され、批

判されているかを精査した。その結果、OrwellはCSやニューレフトにとって、もっとも重要な人物であることが明らかとなった。それは、彼が1940年に発表したエッセイ「鯨の腹のなかで」に反応する論評が、その後1980年代にいたるまで出されてきたことが象徴的に示している。Williams, E.P.Thompson, Stuart Hall, Salman Rushdie, Edward W. Saidら、CSの中心人物たちは、みなこのエッセイについて論評を書いている。これらの論評を、時代順に細かく分析しながら、Orwellの評価のうちに見え隠れするモダニズム修正の動向を詳らかにした。

「Antonio Gramsci のポピュラー観」：Antonio Gramsciは、ニューレフトの政治活動にとって、思想的なバックボーンとなったモダニストである。彼が重要視した国民の「コモン・センス」は、1968年の公民権運動や学生運動でも鍵語として用いられ、後のサッチャー主義はそれを逆手にとって、新しい「コモン・センス」観を提唱するに至る。その歴史的な展開を一時文献をもとに分析した。

「サッチャー流ポピュリズム批判」：サッチャー主義は、マイノリティや移民、不良少年を特別扱いすることを批判し、「ごくふつうの人びと」の「コモン・センス」を大事にする政治を合言葉に、さまざまな非社会主義化政策を断行した。当時、ポスト構造主義言語学の影響下にあったバーミンガム現代文化研究センターは、これを「意味づけ(signification)」の闘争だと考え、ことば(指示詞)をももの(指示対象)からずらす戦略を取り始める。例えば、Stuart HallはGramsciの「ヘゲモニー」を脱構築的に読み替えた評論を書き始めるし、Kobena MercerはEnoch Powellの移民排斥発言を準備したものが、1960-70年代にニューレフトが繰り広げた「ごくふつうの人びと」のための政治言説であると説いている。サッチャー政権下にニューレフトのことばが着服・横領(appropriate)されるなかで、CSが採ったポスト構造主義的な戦略を分析した。

「文化唯物論批評の誕生」：バーミンガム現代文化研究センターの活動は、脱モダニズム政治学へと傾斜していったのに対して、ケンブリッジにいたWilliamsやTerry Eagletonなどは、記号論に偏りすぎた文化概念に飽き足らずにいた。彼らは、社会主義のことばがサッチャー主義により古語や廃語にされていくのに危機感を抱き、かつてのマルクス主義文化論とはまったく違うかたちで、唯物論(materialism)を文化の議論に割り込ませる方策を考える。その策の1つが「文化唯物論批評(cultural materialism)」であった。しかしこの動きは、実は1930年代のモダニズムへの先祖がえりという様相を呈していたように思われる。最終年度には、この仮説を裏付けるべく、海外での調査を行

った。

4. 研究成果

補助金助成を受けた期間中には、英国の学術誌 *Keywords: A Journal of Cultural Materialism* に掲載された論文を含む、計5本の論文を発表した。しかし、もっとも大きな成果は、助成期間最終年度に1冊の本として出版した『ニューレフトと呼ばれたモダニストたち 英語圏モダニズムの政治と文学』(松柏社、2013年6月)である。補助金助成期間中に海外で行った資料収集や聞き取り調査をもとに、書き下ろしている。モダニズムとニューレフトの関係性については、本書の本論(第二、三章)で、詳細に分析されている。1930年代から1980年代までのモダニズム政治学を支えるものとして、ウィリアムズによる一連の“The Politics of Modernism”論がある。それ以降には、ウィリアムズに大きな影響を受けた批評家たちのなかから、エドワード・W・サイドによる“The Travelling Theory”、テリー・イーグルトンによるCultural Materialismなどの議論が生まれた。本書ではその系譜を整理している。なかでもモダニズムの「新しく始める」試みがウィリアムズの文化胎動論やサイドによる「起源」と「始まり」を分断しようとする方法に継承されていく過程が明らかとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

山田雄三 「1983年モダニズムの危機」 サッチャー時代のマテリアリズム

掲載誌名：『ポストコロニアル・フォーメーションズV 言語文化共同研究プロジェクト2009』(大阪大学大学院言語文化研究科発行) 査読無

ページおよび発行年：1-10 ページ(2010年5月発行)

山田雄三 「始めることの困難と展望 1970年代のモダニズム政治学」

掲載誌名：『ポストコロニアル・フォーメーションズVI 言語文化共同研究プロジェクト2010』(大阪大学大学院言語文化研究科発行) 査読無

ページおよび発行年：7-16 ページ(2011年5月発行)

Yuzo Yamada, “The “Far West” after Industrialisation: Gwyn Thomas, Ishimure Michiko and Raymond Williams’

掲載誌名： *Keywords: A Journal of Cultural Materialism*, No.9 (The Raymond Williams Society) 査読有

ページおよび発行年：121-133 ページ(2011年10月発行)

Yuzo Yamada, ‘Far West after Industrialization: Gwyn Thomas and Ishimure Michiko’

掲載誌名: *Raymond Williams Kenkyu Special Issue: Proceedings of Fiction as Criticism/ Criticism as a Whole Way of Life* (Raymond Williams Kenkyu-kai) 査読無
ページおよび発行年: 23-38 ページ (2012 年 7 月発行)

山田雄三「文通するニューレフトたち 1980 年代の核兵器・核エネルギー問題をめぐって」

掲載誌名: 『ポストコロニアル・フォーメーションズ VIII 言語文化共同研究プロジェクト 2012』(大阪大学大学院言語文化研究科発行) 査読無

ページおよび発行年: 37-41 ページ (2013 年 5 月刊行)

〔学会発表〕(計 4 件)

Yuzo YAMADA (招待発表) 国際シンポジウム「Fiction as Criticism / Criticism as a Whole Way of Life」

学会名: Raymond Williams in Transit II

場所: 日本女子大学

日時: 2010 年 9 月 25 日

山田雄三 (招待発表) シンポジウム「知を涵養する 成人教育と文学研究」

学会名: 新英米文学会

場所: 早稲田奉仕園

日時: 2011 年 11 月 19 日

山田雄三 (司会) シンポジウム「サイド再読 没十年後の遺産」

学会名: 日本英文学会関西支部大会

場所: 龍谷大学

日時: 2013 年 12 月 22 日

Yuzo YAMADA (コメンタリー) 国際シンポジウム「Culture as a Whole Complex / (Re)Action to Industrialism and Laissez-Faire」

学会名: Raymond Williams in Transit IV

場所: 日本女子大学

日時: 2014 年 3 月 16 日

〔図書〕(計 1 件)

山田雄三 『ニューレフトと呼ばれたモダニストたち 英語圏モダニズムの政治と文学』

発行所名: 松柏社

ページおよび発行年: i-iv, 1-266 ページ (2013 年 6 月刊行)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況 (計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

<http://www014.upp.so-net.ne.jp/raywillyz/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 雄三 (YAMADA YUZO)

大阪大学・文学研究科・准教授

研究者番号: 10273715

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: